

巻 頭 言

高知女子大学看護学会長

松 本 女 里

東日本大震災から一年。この想定外の大事故は私達に大きな衝撃を与え、様々なことを考えさせてくれました。一瞬にして今まで築きあげてきた生活が崩れ去り地域社会までも崩壊するなど誰も想像だにしておりませんでした。

自然災害の恐ろしさ、それに加えて安全だと考えられていた原子力発電の事故など、この科学が高度に発達した現代でも防げ得ない事実到人々の不安がつのりました。地震が多発する日本列島、何時、何処でも起り得る可能性があります。現に震災についての予測がメディアによって報じられ、また原発をかかえる地域では、その安全性について論議され不安感が高まっております。

被災地の現状を知るたびに私達は、人が生きていくために何が必要なのか、何を大切にしなければいけないのかが問いかけられ、それぞれの価値観が問われることになりました。

生命、安全、家族、友、人と人とのつながり、平凡な日々、普通の生活が営まれることのありがたさ等々、あらためて考えさせられたことと思います。絆と云う言葉が使われ、その重みも感じたことです。今もお仮設住宅での生活を余議無くされ、また、住み慣れた土地を離れて慣れない土地で暮さねばならない人、先の見通しのたたぬ日々を送る人など様々な問題をかかえ災害の復興には、まだまだ長い時間を要します。

原発の事故後、環境や食品などの放射能汚染が恐れられ、多くの人々が健康障害の情報に翻弄され、それによる風評被害は深刻になっております。私達は日常的に宇由線や岩石に含まれるウランやトリウム、食品にはもともと自然の放射性物質が含まれており、常に自然界からの放射線を受けているため、環境や食品中の放射性物質をゼロにすることは不可能です。

医療現場では、レントゲン撮影やMRI造影など欠かせません。がんには直接照射する放射線治療も行われます。放射能汚染をいたずらに恐れるのではなく、正しい知識を持って対処し、ものごとの一部のリスクだけを見るのではなく、広い視野で全体を見て考え判断することが重要なのです。

人はひとりでは生きてゆけません。他者の心やつらさも、思いやり寄り添い支え合うことが社会の安全を守るのではないのでしょうか。それによって安心が得られるのではないかと考えます。

天災は避けられませんが、普段からそれにそなえ、何時何処で何が起こっても生き抜くことが出来るよう物心両面のそなえが大切です。また私達は看護職として平素から人命の救助に冷静な判断や行動が出来るように心がまえを持つことが必要です。そのためには専門職として知識技術を身につけるべく、研鑽を積むことを心がけねばなりません。それは自分自身を守ることになり、他者を助け社会に役立つことにもなるのです。私達は常に成長し続けてゆく努力が必要なのです。